

逃げるための後宮行きでしたが、
なぜか奴が皇帝になっていました

吉高 花 Hana Yoshitaka



アルファポリス文庫

第一章 豪商の娘

それはあまりにも懐かしい、だが絶対に見たくなかった顔だった。

「お……前……っ！」

久しぶりに訪れた皇都の大通りで、のんびり点心や饅頭を物色しながらぶらぶらしていた私の目の前にいきなり現れたその男は、私を見て一瞬固まったかと思うと、あぐりと口を開け、絞り出すようにそれだけ言った。

「げっ!!」

私はその声ではっと我に返り、思わず喉の奥からおかしな声が漏れる。

元々良い見た目だった記憶はあるが、それがさらに綺麗に整って、奴はそれは美しい顔になっていた。が。

それでもやはり、昔に嫌というほど見ていた奴の顔には違いなかった。

「ここで会ったが百年目！」

「さよならあ!!」

「逃がすかあ!!」

くると反転して脱兎のごとく逃げ出した私の後ろからはそんな奴の声が聞こえてきたけれど、私はそのまま振り返ることもなく、ひたすら全力で逃げ出した。

絶対に捕まってるものか。もう奴とは関わらないと決めたのだ!

もう二度と!

奴は今回も上等で綺麗な服を着ていた。あれは貴族の着る服だ。

ということは、きっとこんな庶民の小娘を全力で走って追い掛けるようなことは立場上でできないはず。

そうは思いながらも万が一を思うと振り返る余裕もなく、私は息を切らしてとある大店に走り込んだのだった。

大きな店の中を勢いそのままでまっすぐ走り抜け、奥の扉を開けて飛び込む。

「……どうした春麗しゅんれい。そんなに慌しんぱんててなにかあったのか？」

そこに居たのは、商談中の王嵐黎おうらんれい。この国一番と言ってもいいほどの大商人であり、今世の私の義父だった。

「……逃げてきた。かくまって」

私がぜいぜいと荒い息を吐きながらそれだけ言っただけでその場にへたり込むと、筋骨隆々のいかにも悪そうな大男である父さまはすっと目を細めた後に椅子から立ち上が

り、今私が入って来たばかりの扉の外へと出ていった。

私は今世はこの私を溺愛してくれる裕福な義父の庇護下で、ぬくぬくと暮らすと決めていた。

この三度目の人生こそは、奴を忘れて楽しく充実した人生を送る。
そう決めていたのに！

その日の夜。

「それで春麗、本当にその男に心当たりはないんだね？」

さすが、高級宿の中でも最上級の部屋である。

旅する金持ちや高官が存在する限り、どんな街にでもそのような客層を狙った宿や高級な部屋はあるものだ。

そしてそういう宿の防音は、たいていしっかりしているものだ。

そう、つまり問い詰められるにはうってつけの場所なのである……

「えっと……どこの誰かはさっぱり……」

ついしどろもどろにはなったが、それでも嘘は言っていない。決して。が。

「でも逃げたということは、知っていることもあるのだろうか？」

「あー……多分、皇族……かなー……？」

私はあっさり正直に吐いた。なにしろ人の嘘を見破るのが得意なこの父さま相手に、誤魔化すことなんてできないのだから。

だけれど私が今の奴について知っている情報なんて、本当に他にはなにもなかった。

「皇族？ 春麗の知り合いに皇族がいるとは知らなかったぞ」

「知り合いじゃない。会ったのは初めて」

しかしそのところははっきりしておこうか。

そう、「今は」知り合いじゃあない。全くもって。

「知り合いじゃないのに知っているのか」

「ああー……むかーし見かけたのよ。皇族が集まっている中にいるのを」

「でも向こうはお前のことを知っているから追い掛けさせたんだろう？」

「あー……なぜかなー？ 人違いじゃないのかな……？ はは……」

私は完全に顔が引きつったまま乾いた笑いを漏らした。

しかし全部説明できる自信もないのだ。

なにしろ奴と知り合いだったのは、前世のことだから。

私には前世の記憶がある。

一回目は日本。だけれど二回目と三回目はなぜかこの、最初の人生では中華風と呼

ばれるであろう知らない世界で生きてきた。

その間、私の中身は変わっていない。

理由は全くわからないが、とにかく前世の記憶を引きずりつつ、私はかつて日本で生きていた人間のまま今世も遅しく生きていた。

忘れられない記憶とともに。

その忌まわしい記憶の中心にいるのは、一人の男。

そいつは最初の人生のときにずっとずっと腐れ縁で、何年か離れることはあっても必ずその後にもまた再会する、そんな不思議な奴だった。

あんまり繰り返し再会するものだから、二人で今度はいつ人生が重なるんだろうねと、しょっちゅう笑い合っていたくらいだ。

進学で離れても、引越しがあっても、なにがあっても次のステージでまたばったり再会する。

もちろん社会人になってもそれは変わらず、いつしか私たちは大人になり、互いに一番気の許せる飲み友だちのようになっていた。

そんなあるときまた二人で笑い合った後「じゃあこのままもし三十までお互い独身だったら、もう結婚するか俺たち」、奴はそうぼつりと言った。

だから私はいつものように軽く、それもいいわねなんて返しながら、密かに三十ま

では独身でいようと決めた。

その後は「どうする、このままだったら本当に俺たち結婚するしかないぞ。いいのか？」と奴が私をからかうたびに、私もなんだかんたクールな顔して「いいんじゃないの？ 他にもらつてくれそうな人もいないし」なんてやっぱり笑って返していた。

冗談には冗談で、皮肉には皮肉で。

そんなじゃれ合うような日々がもししたらこのままずっと一生続くかもしれない、そんな風に私はほんやりと思つて、いや願つていた。

なんと私たちはその約束の三十まであと二年というところで、二人仲良くトラックに轢かれてしまった。

最後の記憶は、暴走するトラックを見てとつさに私を庇うように抱きしめてくれた、その力強い奴の腕の感触と温かさ。あとは、

「ちっ、あと二年だったのに……」

そんなつぶやきを聞いたような、聞かなかったような。

だからこの見知らぬ世界に転生したとわかったとき、まさか人生の引き際まで一緒だったとは、ほんとにとんだ腐れ縁だったな、と思つた。

だけれど次の瞬間には、そんな記憶なんてなければよかったのにと悲しくなったのも覚えている。

どうせ生まれ変わるなら、気持ちも記憶も新たに新しい人生が始まればよかったのに。

私は始まったばかりのこれからの一生を、今はもういない奴の記憶を抱えながら生きていくのかと、ひたすら悲しくて揺りかごの中でただただ泣いた。

それでもせっかく生まれ変わったのだからと、私は新たな人生を頑張って充実させようとはしたのだ。

でももうどこにもいない奴のことがどうしても忘れられなくて、その記憶を振り払うように仕事に没頭していたら、気がついたら恋愛には疎いまま大人になってしまった、そんなある日。

なんと私は見つけてしまったのだ。

奴を。

偶然、たまたま、奇跡的に見つけたあいつは、ちゃっかり裕福な皇族になっていた上に、幸せそうに笑っていた。

綺麗な奥さんらしき女性と一緒に。

……………どういうこと？

いや生まれ変わった記憶がないならおかしくはないのだけれど。

そりゃあ皇族だったらお嫁さんだって来るだろうさ。

でも私が奴を忘れられずに、うっかり人生を半分ほど棒に振っているうちに、なに？

あいつは一人で幸せになってました？ 私を綺麗さっぱり忘れて？

それは、なんだか――

許せん!!

別にいまさら前世の約束をどうこう言うつもりはない。

でも、その時はなんだか割り切れない怒りが湧いたのだ。

うっかり前世の記憶に囚われて、奴を恋しいと思う気持ちを引きずっていたのが自分だけだと知ったときのショックと悲しさと、そして少々の恥ずかしさ。

だからもちろん、私は即座に切り替えたとも。

じゃあ、私も素敵な別の男と恋愛して結婚して、幸せになってやる!

しかし悲しいかな決意したまではよかったものの、なんだかんだと結局恋人さえもできないまま時だけが過ぎていき、最後はまた私は独身で仕事人間のまま、なんと前世で死んだのと全く同じ年齢でうっかりぼっくり逝ってしまった。

どうしてそんなに毎回早世するのか私。しかもどちらも交通事故ときたもんだ。

トラックだろうが馬車だろうが轢かれて終わり。
毎回死因が同じとか、全然笑えない。

でも今度こそ前世の記憶は綺麗さっぱり消えて、奴のことも忘れられるに違いない、
最期はそんなことを思ってたはずなのに。

いつ消えるんだ、この記憶。まさか今度は人生やり直し。
もぅいいかげんにして欲しい。

しみじみとそう思ったのは、この世界での人生が巻き戻ったらしいと知った時
だった。

私はまた見覚えのある揺りかごの中にいて、私をあやすのは懐かしい母の声。

つまりは今度は前世の記憶があるばかりか、なんと前回の貧乏暇無しで一人ぼっち
で終わった人生をまたはじめからやり直しとなったのだ。

ということはこの世界で、また奴は裕福な皇族として綺麗なお嫁さんをもらい、そ
して私は貧乏暇なしの独身のまま、また馬車に轢かれてぼっくり死ぬのだろうか。

二度あることは三度ある。いやでも待って。それはなんて悲しい人生なの。

そんな人生はもう嫌だ。絶対嫌だ……！

私は心からそう思った。

ならば今世は奴のことなど綺麗さっぱり忘れ、さらには前回の人生で得た知識を最

大に生かして、今度こそ幸せな人生を送ってやる！

私は揺りかごの中で、そう固く決意した。

そうと決まれば、最初に私がやるべきことはただ一つ。

早速にこの母をなんとかしなければ……！

とにかくこの世界の私の母は、幼児の私から見ても絶世の美女だった。

なのに、とてつもなく男の好みが悪いのだ。

散々貢いで捨てられる。

母は幸せそうだったけれど、そんな親のせいで私の生活はずっと貧乏そのもの
だった。

だから今世はとにかく少しでもな人とくっついてほしい。

私の父らしき人の影は前回の人生でも全く無かったということは、どうせろくでも
ない男だろうから復縁などという可能性は最初から捨てた。

でも、とにかくこの母をどうにかしなければ永遠に貧乏から抜け出せないのは確
かだ。

だからこの母を幸せにして、ついでに私も幸せになりたい。

今度こそ。

ということ、私がぼんやりと周りが見えるようになって最初にやったことは、母

に言い寄る男たちの選別だった。

今の母の周りの人たちの中で、一番まともで真面目でちゃんと稼いで浮気もしなさそうな人は、誰かなー？

母は基本的には真面目に生活をしていたので、慎ましやかにしていれば親子二人なんとか生きていける収入もあるようだった。

決して悪い人ではないのだ。子を愛し、真面目に生活する女性。

そのたぐいまれなる美貌は母の美点であり、そのせいで男たちがやたらと寄ってくるのも母が悪いわけではない。

悪いのは、そう、男の趣味だけ。

つねに金をせびり、もう引き出せないとかかると消えてしまう男ばかりを好きになるので、母は前回の人生では最後まで結婚することはなかった。

考えてみれば母が娘より男を優先するタイプだったら、私の人生はもっと過酷なものになっていただろう。

だからその点は今でもとても感謝している。私は前回、貧しいながらも母の愛に包まれてちゃんとすくすく健康に育った。

しかし今世では、ただ漫然とすくすく育っている場合ではない。

この人はすぐ失業しては母にたかる。この人は威張ってばかり。この人はいい人だ

けど気が弱すぎるし、この人は前回の人生で散々不倫をしていたのが後でバレていた。

なかなかこれはという人が見つからない。

しかしそんな私の前に、ある日突然その男は現れたのだ。

（ママ！ その男を掴まえて!!）

私は思わずそう叫びそうになった。いやちゃんと話せば叫んでいただろう。

見覚えのある顔、そして声。

この男が、まさか私の幼い頃に母に会いに来ていたなんて……！

王嵐黎、後にこの国一番の豪商となる男。

今はまだ若くて普通の商人のようだけれど、この男は後に商売を成功させて大金持ちになる。

それを私は知っていた。なぜなら前の人生で、私はこの男の部下だったから！

将来性抜群、人柄も申し分なし。最高ではないか！

私は若き王嵐黎が母のもとを花を持って恥ずかしげに訪れたのを見た時、それまで片時も離さずにつけていたお気に入りのおモチャを取り落としたくらいには、びっくりした。

このチャンスを掴まないでどうする私！

私はすつくと立ち上がると、顔を赤くしながらも一生懸命母に話しかけている若き王嵐黎とつれない態度で対応する母のもとへ、必死によちよちと歩いていった。

なにしろ私は知っている。母は、あの母は、この王嵐黎のような男は好みではない。きつともうすぐ、すげなく追い払ってしまうだろう。

なぜなら今の王嵐黎は、一見細身でひ弱そうな男だから。

母の好みは見た目が悪そうで、かつ筋肉ムキムキの、とにかく男臭い男だ。

あの様子では母につれなくされた彼は、もう来なくなるかもしれない。

なにしろ私の前の人生をどんなに思い返してみても、あんなに若い彼と会った記憶なんてないのだから。

このままでは、きつとすぐに母の前からいなくなってしまう……！

私は必死によちよち歩いて王嵐黎のもとに行くと、とっさに自分にできる最善と思われる行動をとった。

つまりは満面の笑みで、王嵐黎に向かって言ったのだ。

「パパ！」

もちろんびつくりする母と王嵐黎。

しかし他に幼児の私にどうしろというの。今にも母は立ち話を切り上げて、二度と彼を相手にしないかもしれないのに！

「春麗、この人は届け物を届けてくれただけで、パパじゃないのよ？」

母は困惑しながらそう言い、王嵐黎はというと。

「あ、はい……その通りです……」

とちよつと寂しそうにしながら苦笑いしている。

きつとなにか荷物を届けることを口実にやってきたのだろう。でもね、普通荷物を届けにきてくれただけの人は、ついでに花なんて持ってこないのよ、母よ。

いや母もわかっていたのかもしれないが。

「すみません、本当に」

あくまで他人行儀な母と。

「いや、いいですよ。可愛いお嬢さんですね。はは……今何歳なんですか？」

なんとか話を続けたい様子の王嵐黎。だが。

「今はまだ一歳ですわ。もう砂遊びでこんなに汚れて……。ではこの子を洗わないといけないので、そろそろ失礼しますね」

そう言って私を抱き上げると、母はそのまますげなく立ち去ろうとした。

私は焦った。

ダメ！ それはダメ……！

私はとっさにどうしたらいいかを必死に考え、でもなにも浮かばなかったので、唯

「浮かんだ言葉をとにかく叫んだ。

「パパ！抱っこお!!」

私を抱っこして、そのまま私を人質にしてもっと会話をして！

「抱っこおおー!!」

ジタバタジタバタピチピチピチ。

こちらへんは、私の日頃の鍛錬と技が光るのだ。

つまりは秘技、全力での抱っこ拒否！

私は！ここにいたい！あっち行かない!!

そして私は見事母の腕から逃れ……いや落っこち——

「危ない……!」

まさにその時、王嵐黎が母の腕から落下しかけた私を抱き留めてくれたのだった。

素敵！そう、この展開よ！待ってた！

ぴつとり。

これ幸いと、全力で王嵐黎に抱きついた私。ついでに晴れやかな笑顔も披露して。

「パーパっ!」

もう離さないぞ♥

絶対、絶対に離さないぞ！

それからは、あまりに見事な私の懐きように母も王嵐黎の訪問を断ることができなかつたようだ。

王嵐黎はすっかり母に惚れ込んでいたらしい上にその娘まで懐いてきたものだから、それはもういそいそと贈り物を手に毎日のように我が家にやってくるようになった。

そうなる、さすがは未来の大商人。彼は賢い男だった。

母と親交を深めながら、即座に母の好みの男のタイプを割り出したようだ。

そして彼は急速に変わっていく。

めきめきと筋肉をつけて大きくなっていく王嵐黎。

そんな彼を日ごとに意識し出す母。

そしてとうとう王嵐黎の努力は実り、母と彼は結婚した。

私は晴れて王嵐黎の娘となった。

生での彼よりも、もつとずっと早く商売を成功させて大金持ちになっていった。

全ては愛する妻のために。

だからそんな彼が母を病気で亡くした時は、全ての仕事を放り出して三日三晩部屋に籠もって号泣したものだ。

そしてその後もずっと母一筋なのだから、娘の私から見てももう見事というほか

ない。

私はいえ、そんな父さまと生まれ変わったとたんにあっさり他の女と結婚したあの男を思い出して比べては、悲しくなったりもしたけれど。

でもまあ、くよくよしていても仕方がない。前向きに生きよう。

私は人生三周目にして、すっかり悟りを開いていた。

なにしろ人生を二回も送ったのに一度も結婚どころか恋人さえもできなかった、さすがに悟りを開くというもの。

じゃあ、もう無理して結婚しなくてもいいか。

なにしろ今世は自分で商売もして、お金だけはある。私は自由に生きていける。

奴は結婚でもなんでもすればいい。

私は一人で大いに稼ぎ、今世は自由に生きるのだ……！

なのに。

なのにある。

まさか今世で再会してしまうとは。

しかも初対面なのにあの態度。

ということは奴も、私のことを忘れてはいなかったのだ。

……それは許せん!!

記憶がないならしょうがない。でも、覚えていたなら話は別だ。

私のことを覚えていたのに他の女と結婚した男になんて用はない。

私よりも他の女を選んだ男なんて、もう二度と会いたくもない。

金輪際、ちらとも、一生、絶対に関わり合いたくもない！

もちろんきっぱりさようなら！ 永遠に!!

しかし問題は奴が皇族であることである。

前世でそうだったから、きっと今世もそうだろう。

ということは……私は逃げなければならない。

私は今は大商人の娘とはいえ身分は平民だ。

まさか貴族よりも偉い皇族に呼びつけられなんてしたら、逆らうことはできない。

さすがにそんなことをして自分の首を飛ばしたいとは思わない。

しかし逃げるっていつても、一体どこへ……？

この国の皇族というのは、その一族だけでこの国の政治の中枢のほぼ全てを牛耳っている特別な一族で、しかもそんな皇族の中には、なにやら理解できない術や現象を操る人までいるという。

だからもし奴がそんな怪しげななにがしかで私を捜していたら……と思うともう気

が気じゃない。

奴に見つかってまた懷かれた挙げ句に、奴の新婚甘々な生活を間近で見せつけられるくらいなら……いつそ国を捨てたほうがいいのかもしれない。

ただそうすると、義父や弟は泣くだらうな……

などと悶々と悩みながら通りを歩いていたときだった。

なにやら広告が貼り出されてその前に人が群がっている。

なににな……

「後宮女官の募集要項」？

あの皇帝の奥さんたちが住む後宮の、女官……？

……いいんじゃない？

私は目から鱗が落ちる気分だった。

うん、いいじゃないか、後宮！

私はそこに書いている募集要項を熟読した。

今まで築いたものは全て置いて行かなければならないようだ。

しかし、退職制度あり。

ということは、もう大丈夫だと思っただけでも退職して出てくることもできる。

後宮、それは皇帝以外の男は入ることのできない、おそらくこの国唯一の場所だ。

身を隠すには完璧な場所じゃあないか。どうして今まで気付かなかったのだろう。

私はその足で、勢いよく受付場所へ乗り込んでいった。

そしてそのまま私は満面の笑みで、さっさと全ての手続きを終えたのだった。

どうやら聞いた話では後宮の妃嬪を増やすことになったらしく、それに伴い大々的に女官を募集しているらしい。

んん？ 皇帝……で、今誰だっけ？

普段はただ「皇帝」や「主上」としか表現されない天上の人な上にあんまり興味もなかったせいでよく知らないが、たしかぼんやりとした前の人生の記憶では、後宮に大量の美姫を侍らせていた中年のおじさんだったような？

ということは、きっとまたその皇帝が妃嬪を増やそうとでも考えたのだろう。

前の人生の今頃は、私はただの身寄りのない貧乏な女だったので、もちろんそんな身元の保証が必須の仕事なんてものには縁がなくて考えたこともなかった。

だけだ。

……そうだよ。

私はうつかり、嫌なことを思い出した。

私は前の人生のある日、その皇帝が催す宴の下っ端手伝いにかり出されたのだ。

私はもうその時には王嵐黎の部下になっていて、そして人手が足りないからと裏方の仕事の助っ人に行ったのだ。

私は皇宮なんて初めて足を踏み入れたものだから、その見たこともない華やかな世界に興味津々で、仕事をしながらキョロキョロと周りを眺めていた。

そしてそこで見たのは威厳漂う皇帝を囲む、それはそれは雅な皇族の方々、そしてさらにそれを囲むたくさんの華やかな貴族たちの姿だった。

皇帝にだけ許された黄の衣を中心にして、皇族だけが身につけられる紫、そしてさらにそれを囲むその他の色の華やかな貴族たち。

今も昔も好奇心が身を滅ぼすこともあるのだということはいっかりと忘れて、私はそんな華やかな人々を離れたところから眺めていた。

そして私は驚きのあまり固まってしまふことになる。

そこで見つけてしまったのはなんと、奴の顔。懐かしくも憎たらしい、あの腐れ縁の男の顔だった。

私はその顔を見た瞬間、息が止まった。

まさか、同じ世界、同じ時代に一緒に生まれ変わっていたなんて！

けれどもそう、奴は皇族を示す優雅な紫の衣に身を包み、そしてその衣と同じ意匠の、ということとは明らかに妻と思わしき美しい女性と、幸せそうな顔で談笑していた

のだ。

随分綺麗な顔になってはいたけれど、それでもあれは確かに、奴だった。

私はあまりのショックでその日は口がきけなかった。

口を開いたら、思いつく限りの罵詈雑言や恨みつらみが飛び出しそうだったから。奴がいた。同じ世界で、同じ時間を生きていた。

だけれど彼は、私のことなんてすっかり忘れて幸せにのろしくやっていた。

忘れられなかったのは、私だけだったのだ……

それで前回の人生では、じゃあ私も幸せになってやるなんて息巻いたわりには結局その後貧乏暇なしの仕事人間で、誰とも恋仲にもならないまま、また二十八で馬車に轢かれて死んでしまった。

今世も、結局なんだかんだ言ってもこの記憶のある限り、私は奴を忘れられないのだ。

本当にこの記憶、どうにかしてほしい。世の中忘れた方が幸せなこともあるというのに。

きっと奴はまたあの女の人と結婚するのだろう。そして幸せな人生を歩み、私だけが過去を引きずってずうっと一人のまま。

しかもこのままばうっとしていたら、また奴のその幸せそうな姿を見ることになる

気がする。

なにしろ奴とは腐れ縁。切っても切れない、鋼の縁。

その証拠に、なんと生まれ変わった時期も場所も全部一緒なのだ。

たとえ天と地ほどの身分差があっても、それでもこうしてばったり会ってしまったくらいには近づいてしまう。

あああああ、もうあんな幸せそうな奴の姿なんて、二度と、絶対に見たくない。

結局奴は私を選ばなかったのだと、そんな現実なんてもう突きつけられたくない。

あんな悲しい思いなんて、あんな絶望的な光景なんて、もう二度と遭遇しないで今度の人生は穏やかに終えたい。

欲を言うなら今世は誰か素敵な人と、今度こそ相思相愛の愛あふれる人生を送りたい。

そのためにはもう絶対に、うっかりでも、偶然にでも奴の顔なんて見てはならないのだ。

それには、好都合ではないか。

後宮とは、それは皇帝の奥さんたち、つまりは女だけの園。

皇帝以外の男は入れない禁断の場所。

そう、たとえ奴がどんなにお偉い皇族だとしても、後宮にだけは絶対に入れない。

考えてみたら後宮こそが、たとえ高貴な紫の衣を着る奴でも入ることのできない、この国唯一の場所だったのだ……！

いつか私が奴を吹っ切れるまでは女官として後宮で働いて、そしてもういいかと思えたら、その時は後宮を出ればいい。お仕事であれば辞めて出ることもできる。

商売なら伝手と元手さえあれば、いくらでもまた始められるのだし。

そう伝えたら、父さまには泣かれたけれど。

「春麗〜！ パパを捨てて後宮なんて、どうして！ ああ春容〜！ 私たちの娘は可哀相なパパを見捨てるそうだよ……！ 結婚して出て行くならまだしも、後宮だなんて！ 魍魎ちみもりよう魍魎ばつこが跋扈はつこしているとか、怪しげな術を操る人間がいるとかいう胡散臭い噂しかない危険な所じゃあないか……！ そんな所に行くなんて〜〜！」

ガタイの良い、こないいい年になっても雄々しい覇気を保っている大男がさめざめと泣く姿に私はちよつと怯んでしまったが。

しかし、そんな情に流されるわけにはいかない事情が私にもあるのて心を鬼にする。「それは単なる噂でしょう。私は幽霊だって見たことないから大丈夫よ！ それに女官だって山ほどいるんだし。ちよつと働いてみるだけで、満足したらちゃんと帰ってくるから」

「でも春麗は綺麗な子だから絶対に皇帝のお手つきになってしまう！ そうしたらもう一生帰ってこれないんだよ……！」

と、いまだ何処にでも持ち歩いている母の肖像画を握りしめながら、恨めしそうな目を私に向ける父さま。

でも父さま、私がお手つきとか、ナイから。

なにしろ今までの記憶が人生三回分もあるのに、モテた記憶なんて全くないから！ ちょっと自分で言っただけ悲しくなったが、本当にそんな心配なんてなくていいから……

「大丈夫、本当に何年か働いて後宮に飽きたら出てくるからさ。だから父さま、泣かないで？ きつとすぐに飽きると思う。でも、ちょっと後宮なんて華やかな所も見えてみた。それに新しい商売のネタが拾えるかもしれないじゃない」

「うっ……でもすぐに帰ってくるんだぞ？ パパが寂しさと傷心で死んでしまう前に」

「父さまはそんな弱くないでしょうが。手広く山ほど商売して誰よりも活動的な人になを言っているの。でもきつとすぐに帰ってくるよ。手紙も書くし。だから元気でいてね？」

「っ……春容……！ 春麗が冷たい！ まさか僕たちの愛する娘がパパにそんな冷た

いことを言うなんて……！ ずっと僕たちの可愛い娘でいて欲しかったのに！」

おいおいおい。

さめざめと泣く実は泣き虫の父さまだった。

「いや父さま、私もう大人だから、ね……？」

とにかく、来年はあの綺麗な奥さんにデレデレと鼻の下を伸ばしている奴を見つけたい、あの年になってしまおう。

ということはこのままでは、近々またあの光景を見ることになる予感がする。

だからその前に、そんなものを見ることができないような場所に行ってしまうわけば。

たとえ優しい父さまを、そしてまだ小さな弟をも号泣させてしまっても。

ああ優駿^{ゆうしゅん}、旅立つ姉さまを許してね……！

前回の人生ではいなかった私の弟のことを、私はひたすら可愛がっていた。

まだ十代の、母さまにそっくりな弟。

でもそんな大切な父や弟を泣かせてでも、私はこの悪夢から逃げたかったのだ。

第二章 女官

後宮に入った私はとにかく黙々と働いた。

別に他の人と競いたいわけではなく、出世したいわけでもなく、ただ忙しくしていたかったただだから、仕事はなんでも良かった。

これをどこそに持って行って。これを洗っておいて。これを誰それに渡して。そんな指示にははいとひたすら従順に、真面目にこなしていると日が暮れる。

一人で部屋でべったり座ってとにかく資料や報告書とにらめっこすることが多かった日々から、くるくると走り回ってはいろいろな人と関わるお仕事に変わって、毎日夜には身も心も疲れ果てて眠る生活がなんだか新鮮だった。

久しぶりだわこの感覚。

これ、やり直す前の貧乏暇無しの時の生活だよ……

なんて、ちよつと懐かしい。

まあ最初は慣れなくて怒られて落ち込んだりもしたけれど。

それでもだんだん仕事にも慣れて怒られる回数が減ってくると、私はそれなりに仕

事が楽しくなってきた。

ただ最初は一応豪商の娘として、他の貴族やいわゆる良家の娘たちがつくらしい、いわゆる上級の女官の仕事である配膳とか妃嬪のお使いなどのお仕事をしていたのだけれど、そのうちこんな私でもなにもしていないのに、

「ちよつと綺麗だからってうぬぼれて。ただの庶民じゃない。私たちと一緒にいるなんて生意気なのよ」

なんて陰口をたたく人が何人か出てきた。

私、絶世の美女だった母さまに比べたら、前世の容姿を引きずっている分まだまだとっても地味なんだけどな。

でもどうも聞いていると妃嬪になりたかったのに審査に落ちて、でも妃嬪を諦められなくて皇帝のお手つきを夢見て女官になったという人たちがそこそこいるようだ。

しかし現実には厳しい。毎日くるくる働きづめの現実がさぞ辛いのだろう。

まあ家柄の良いお嬢さんたちの意地悪くらいでは、元は貧乏出身、今世はいろいろな場所では様々な人を見てきた私には、泣いて実家に帰るほどの辛さではなく。

だから面倒だとは思いつつ、ひたすら心を無にして仕事だと言われたことをなんでもはいはいと聞いて働いていたら、いつのまにか洗濯場が私の職場になっていた。

それはきつい汚れるので嫌われているいわゆる下級の仕事だけれど、プライドが

高くて気の強い同僚に食事のおかずやおやつを取り上げられたり、陰口や嫌みを言われたり意地悪されたりするよりは随分と居心地も良かったので、私に不満はなかった。もともと前の人生では貧乏だったから全て自分で家事をしていたし、病気になるた母の世話もしていた。それに洗濯場の同僚はみんな庶民の出で仕事を求めて応募してきた娘たちばかりなので、同じ庶民として気さくな付き合いができた。

毎日肅々と洗濯をして絞って干して。その合間にみんなでおしゃべり。

幸い手荒れとは無縁の体質だったから、なかなか楽しいお仕事生活。

そうなるにつかり下っ端女官扱いで、夜も大部屋で雑魚寝だし食事の質もいろいろ質素にはなつたけれども、まあもともと美食家というわけでもないしね。

なにしろ今世は美味しいものが食べ放題だったので、そんな美味しいものを散々食べてきた私は今更それほど甘味や珍味を食べたいとは思わない。この仕事をやめたらもっと美味しいものを好きなだけ食べに行けばいいと思うと、今はこれでもいいと思っ

てしまう。それに箱入り娘のお嬢さんたちはさすがにこんな所に来てまでいびつたりはしないので、私は洗濯場で楽しくお仕事をするようになった。

「あの人もう一生洗濯場でいいわよね。さすが庶民、抵抗ないみたいだし」
そう言ってクスクスと笑われているくらいが平和というものだろう。

でも、みんなそんなに出世したいもの？

ここでの一番の出世は、妃嬪になることなんだろうけれど。

どんな下級の使用人でも、いったん皇帝がお手つきしたら即座に妃嬪に昇格である。でもこの国も、妃嬪の階級は上から下まで山ほどあるのだ。

一回味見ただけでポイされた女は、下級妃という名の籠の鳥となって、二度と皇帝と会うことがなくても後宮から一生出られなくなる。

その一回で懷妊すればまだいいのかもしれないけれど、そんな低確率なものに人生を賭けようなんて、私には思えない。

気に入った若い娘を気分ですまみ食いするような中年に全てを捧げて、なのにあっさりポイ捨てされる人生なんて、私は全力で遠慮したい。

くわばらくわばら。

上級女官のままお手つきに怯えるよりは、実は洗濯場で洗濯している方が気楽だった。

皇帝なんて、大勢の妃嬪を気まぐれにつまみ食いしているのを遠目に眺めるくらいがいいのよ。ええ十分です。

そんな感じで全く後宮の内部事情には興味もなかったのだから知らなかったのだけれど、洗濯場で世間話をしている内に、なんだかいろいろ見えるようになってしまった。

どうやら今のこの後宮には、上級妃がなんとたったの二人しかないらしい。しかも、なんと皇帝のお渡りが全くないと。どちらの上級妃にもまだお渡りが一度もなくて、単なるお飾りのようになっていてという話だ。

んん？　なんだか昔の記憶と違うような……？

たしか前世で見たあの中年の皇帝は、女好きで後宮に入り浸りという話だった気がするのだけれど、その話はどこにいつてしまったのか。

それにお渡りがないなら、跡継ぎはどうするの？

たしか次の皇帝は現皇帝が指名するのよね？

でも指名する子供がいないのでは困るんじゃない？

と思つたら。

事情通の同僚たちが親切にも教えてくれた。

「指名はまだよ。でもそういうときは皇族同士の話し合いで決めるから、急いでないんじゃない？　先帝の御子もたしかお二人いらつしやるし」

「そのうちのお一人が妃嬪最高位の四夫人の中でも一番上の貴妃さまだから、貴妃さまが今の皇帝の皇子を産めば確実に指名されるでしょ。だからきつとそれを待っているのよ」

「ぜんぜんお渡りがないのに？」

「そこは……徳妃さまのお父様が太保さまだから邪魔しているとか……？」

「でも貴妃さまは太師さまが後押ししているでしょう。なら貴妃さまの方が上でしょ？」

太師だの太保だの皇宮の役職もわかりづらいが、たしか太師というのが一番上だったはず。そして太保は二番目である。

基本皇族が要職を占有するこの国なので、そこらへんの高官たちもまず皇族だろう。もちろんそんな人は自分の娘を四夫人、つまり上級妃の中でも最高位の四人の内の一人にしてしまうのだね。

そして通常は四夫人の中から皇后が選出されるという。

だから二人は今まだ決まっていない皇后候補でもあるのだった。

そして同時にその二人は、太師と太保という皇宮の頂点を争う官吏二人の代理戦争をしているとも言える。

大変だねえ、四夫人も皇帝も。それではうつかり好きだからとどちらだけを寵愛したら、皇宮でのお仕事にまで影響が出そうだ。

もしかして、皇帝はそんな状況が嫌になって下級妃をたくさん作ることにしたのだろうか。そしてその第一歩が、今回の後宮の増員なのかもしれない。

「でも今回下級妃が百人入ったじゃない？　その中から寵愛される妃嬪が現れるかも！」

「でもその妃嬪も大変よね。四夫人のお二人だけじゃなく、太師さまと太保さま両方からも睨まれるんでしょ？」

「なに言ってるの！　皇帝が一番偉いんだから皇帝の寵愛が一番強いだよ！」

「それで今まで何人の寵妃が亡くなっていると思っているのよこの後宮で」

「でも皇子さえ産んじやえば勝ちでしょ。もう誰も逆らえない！」

「でも周貴妃さまと呉徳妃さまには虐められそう。特に周貴妃さまのお母さまはあの周皇太后だから、下手したら殺されちゃうかも」

うっかり新入りがそう言ったとたん、洗濯場の全員が一斉に気まずそうな顔をして口をつぐんだ。

突然みんなが黙々と真面目に手を動かし始める。

周皇太后……その名はこの後宮で、迂闊に口にしてはいけないという暗黙の約束のようになっている人物だった。

周皇太后は前皇帝の妃嬪だった人で、たしか四夫人の中の貴妃だった人である。

だから本来なら今は貴太妃という位のはずなのだが、皇太后と呼ばなければ壮絶な折檻が待っているそうで、そのため今は誰もが彼女を皇太后と呼ぶのだそうだ。

彼女にそれができるのは、先代皇帝の子が今の周貴妃と離宮で育てられているという幼い皇子のみだからだ。

この皇子の方はまだとても幼く、生母も下級妃だった上になんの後ろ盾もなく、今もひっそりと隠れるように後宮のはずれで二人で暮らしているそうだ。

それに対し周貴妃は当時の貴妃の娘。前皇帝が溺愛し、次代に指名されていたら女帝になっていたかもしれない人だ。

だから今は周皇太后が皇女の母として、金持ちの実家と楊太師という最高位の高官を味方につけて好き勝手……こほん、権力を振るっているらしい。

娘が今の皇帝の貴妃になったのも、そんな周皇太后の鶴の一声だったそうだし。

しかしとにかく黒い噂のある人で、周皇太后の機嫌を損ねた人物はもれなくしばらくすると皇宮にも後宮にも姿を現さなくなるとか。

だからうっかり悪口なんて危険すぎてこの後宮に慣れた人なら絶対に言わないし、間違ってもそんなものに同意もできないのである。

それに比べると、とんと皇帝の話は出てこない。おそらく皇帝のお渡りが全くないので、庶民ばかりのこの洗濯場に皇帝をよく知る人間がいなのだろう。

そんな中で聞いた今の皇帝の情報といえば、皇族の中でも末端の方にいた人らしいということくらい。

でもこの国の皇帝位は基本、皇帝が直接次を指名するし、もしも指名をせずに崩御した場合は皇族たちの話し合いで決まるそうなので、歴史を見ても皇帝の皇子が必ず後を継ぐとは限らない。だから実はそれほど珍しいことでもないらしい。

まあ我々国民としては、ただの世襲より能力のある人が皇帝になってくれた方がいい。

血筋は高貴な妃嬪で補えば良いのだ。

この国の後宮の妃の階級は山ほどあって、まずは美貌を認められたり大金を積んだり有力者の強力な推薦があったりした娘が審査に合格すると、下級妃になれる。

その下級妃が皇帝の寵愛を得たり権力とか利権とか裏取引とかがからんだり、他にも皇子や皇女を産んだりすると九嬪という上級妃になれる。ちなみに九嬪は九つの位だから九人しかいないかというと、歴史上は何十人もいたこともあるらしいので実質人数制限なし。

だが、そこからさらに上の四夫人となると、次代の皇帝の母として相応しい出自や美貌、教養、それらを厳しく選考されて、見事皇宮のお偉方のお眼鏡にかなわないとなれないらしい。

要は皇宮の高官、つまり皇族たちが認めなければ四夫人という妃嬪最高位かつ皇后候補にはならないのだ。さすが我が国、後宮までも皇族が握っていた。

「それにしても下級妃の方々には特に美貌を重視して集められた百人だから、それはもう華やかなものよ」

下級妃たちの宮に洗濯物を届けに行ったらしい女官がうつとりと言った。

「百人の美女かゝさすがの皇帝もころつと態度を変えそうよね」

「四夫人のお二人が泣くか怒るかしそう」

「でもそれが後宮じゃない？　すべてが皇帝のものなんだし。お二人はきつと皇后にさえなればそれでいいのよ」

「まあ皇后はこの頂点だからね」

「どんなに寵愛があっても皇后にはね……」

そう。皇后はその位の高さから、誰でもなれるものではないそう。

全てが完璧でないといけないらしい。完璧な出自、完璧な美貌、完璧な教養、そしてなにより完璧な高官、つまり皇族たちからの支持。

だから我が国ではその皇后になれる資格が四夫人にしかないのだ。

皇帝の寵愛だけでは超えられない、それほど皇后、そして四夫人という位は他の妃嬪たちとは別格らしいのだった。

だから今はその二人の内のどちらかが皇子を産むことを周りは期待しているだろうに、どうして皇帝のお渡りがないのだろう。

聞いた話によると、いわゆる「皇族」の数自体が減っているそうで。そのことに焦った結果、後宮に全くよりつかない今の皇帝とにかく後宮へ行かせようと今回の妃嬪大增員計画が持ち上がったということだったらしい。

そしてその増えた下級妃たちの世話のために女官も募集された結果の今である。とにかく素晴らしいタイミングだった。

その点は私も皇帝にとっても感謝している。

しかしそんな姿を見せない皇帝のせいで、覇権争いもない代わりに刺激的な話題や楽しみも大してない穏やかな後宮の女官生活だ。

でもそんな生活が物足りなくて、刺激を求める人たちはいるもので。

今、そんな妃嬪や女官たちの人気を一身に集めているのが宦官だった。

特にまだ若くて美しい宦官が大人気だ。

まあわかる。それはわかる。

私だって一番人気の李夏さまを見た時は、ついむふふと喜んでしまうくらいだから。李姓が多すぎるせいで、李夏南の名前の最初の夏をつけて李夏さまと呼ばれているこの方は、なんとこの後宮を統括する内侍省の長、太監長である。宦官の中でも一番偉いのだ。

なのにその李夏さまは若く、まるで天女のような美しさ。

その中性的な美貌が大抵の妃嬪たちよりも美しいのではと言われているほどの宦官であった。

はあ……美しいものを見ると心が浄化されるわね……

男性的な背の高さと女性的な線の細さが美しく調和する芸術品のような容姿。つややかで長い黒髪と薄めの目の色がまた宝石のよう。その上所作までもが上品かつ優美で。

なんて完璧な美なの……

中身は優秀でお堅いお役人様なのだろうけど、なにしろ見目が麗しいので後宮では李夏さまの通った後には魂を抜かれてうつとりする女官が続出するのである。

そんな日々のささやかな楽しみをご褒美に、私はひたすら頭を無にして黙々と、そこそこ楽しく働いていた。

そう、この「摸」を見るまでは。

その時私は久しぶりにあの夢を見ていた。

いつものように奴が私に微笑みかけてなにかを話した後、姿が突然消える。

私は知っている。この後奴は私の目の前にあの綺麗な女の人と一緒に現れる。その

時の奴は隣の女の人に、幸せそうに微笑みを向けているのだ。

この後宮に来るまで、嫌という程見ていた悪夢。

ただいつもと違ったのは、たまたまその時に一緒に雑魚寝している女官仲間の寝返りにもぶつかられたのか、自分になにかがぶつかった刺激で目が覚めたことだった。はっと目を開けたその目の前には。

白くぼんやりとした半透明の小さな「獺」が、今まさになにかを飲み込もうとしているような、あんぐりと口を開けた状態で私のことを見つめていたのだった。

しばし見つめ合い固まる獺と私。

獺、って、たしか悪夢を食べるっていう動物だったよね……？
でも、こんなに小さかったっけ？

「きゅっ？」

でもその獺はあんぐりと開いていた口を閉じるとそう短く鳴いて、こてんと頭を上げて私の顔をじっと見た。

私はというと、固まったそのまま、ただ見つめ返すのみ。

だって、一体この状況にどう対応すればいいのか。

沢山の女官たちが雑魚寝しているこの寝所で騒ぐわけにはいかない。みんな日々の仕事で疲れているのだ。夜中に私が騒いだせいで起こされたらきつととても嫌だろう。

と、そのまま半透明の獺と見つめ合うことしばし。

そのころんとした体型と長い鼻がとても可愛らしく、つぶらな黒い瞳はじっと私の顔を見つめていた。

そしてしばらくした後にその獺は、「きゅうう？」と悲しげに鳴きながら私になにかを目で訴えてきたのだった。

悲しげ……？ ん？

もしかして、ご飯を食べ損ねたって言っている……？

その時私はやっと、この後宮に来てからあまり奴の夢を見なくなったのは、この獺が私の悪夢を食べてくれていたからかもしれないと、ぼんやり思ったのだった。

……じゃあ、とりあえず、寝るか。

うん、きつとこの獺は私の夢を食べようとしていたのだ。ちょうど食べようとした時に私が起きてしまったから食べられなかったのだろう。

だったらまた寝ればいい。またあの悪夢を見そうになったとしても、きつとこの獺が食べてくれる。

そう思ったら私はなんだか安堵して、あつという間にまた眠りに落ちていった。
結局あの獺も夢だったのかもしれない。

半覚醒状態で見た幻。

うんきつとなにかを勘違いしたか、見間違えたかそれとも本当に夢だったのだ。そう思えばよかったのに。

……なぜまだいる？

私は朝起きて、急いで身支度（しえど）を調べてお仕事を始めようとしたその時、足下に夜中に見たあの猯（げく）がうろろしているのを見つけた。

思わず私は動きを止めて猯（げく）を見つめる。

すると猯（げく）は、そんな私に気がついて、「きゅ？」と鳴きながら私のことを見上げた。そのつぶらな瞳と目が合う私。

どうということ？

「きゅー」

そう鳴いて私の足に擦りついてこようとしているこの子は、昨夜のあの猯（げく）よね……？

と思わず足下を見て固まっていたら、後ろから同僚に小突かれてしまった。

「ちよつと春麗、どうしたの？ こんな所で立ち止まって」

そんな同僚の声にびくっとしてから「あ、なんでもない」と返すと、その同僚は不思議そうな顔をして去って行った。

ということは、この猯（げく）、他の人には見えていない？

しかし私の目には、昨夜よりもつとはつきりと、まるで実体があるかのような存在感で見えている。

でも後宮で、もしこんな動物がいたら普通は大騒ぎよね？

犬や猫ならまだしも、なにしろ猯（げく）なのだから。

妙に小さい気はするけれど、でも猯（げく）には違いない。そんな普通にそこらへんにいるけれどもその後も誰にも咎められず、なにか聞かれるどころか周りは淡々といつもの日常を送っている。ということは、やっぱりこの子が見えているのは私だけのようだ。

うーん、どうしよう。妙に懷かれてしまっているみたいなんだけど……

でも誰にも見えないのに、ここに猯（げく）がいるんですと言ってもただのお騒がせな人になるだけなのわかるから。

……………

うん、放っておこう。そうしよう。きつとそのうちどこかに行くでしょう。

そんな期待のもと、私は極力気にしないようにしてお仕事を開始することにした。しかし。

うん、一向にどこかへ行く気配がないね。しかも妙に可愛いったら。

ずっと私の足下から離れないで、たまに目が合うときゅうきゅう鳴いて嬉しそうな猿ぼくと何日も一緒に過ごすうちに、私はすっかりこの猿ぼくに情が移ってしまっていた。

ころころして、大人しくて、なんて可愛いんでしょう。私はとうとう周りに誰もいないときに、思い切ってこの猿ぼくに触れてみようとした。撫でられるかな？

そう思って手を伸ばしたら、なんと猿ぼくの方から頭を差し出して撫でられにきた。

あああ、なんて可愛いんでしょう！

だけれど私の手は猿ぼくの頭を通り過ぎ……

うん、触れなかったか。そんな気はしていた。だって今でもちよっと半透明だもんね。

「バクちゃん、あなたは どうして私のところにずっといるの？」

ある日そう聞いた私のことを、そのつぶらな瞳でまっすぐに見上げ、そしてまた「きゅっ」と鳴いたバクちゃんだった。

なんだか嬉しそうだなとは思ったけれど、残念ながらなんと答えたのかはわからない。

だけれどその後も私から離れる気はないらしく、ほとんどの時間を私の足下でうろちよろしているのだった。

たまにふいっとどこかに行つて、そして満足げに帰ってくるのは、もしかしらばこの誰かが見ていた悪夢を食ってきたのかもしれない。

まあ誰にも見えてはいないみたいだし、それに餌や排泄の世話の必要もないなら、まあいいか。そのうち飽きたらまたどこかに行くだろう。

私はそう思っただけの猿——臨時でバクちゃんと命名——との生活を楽しむことにした。

たまにちらりと目をやると、バクちゃんの方もそれに気がついて見上げてくるのがなんとも嬉しい。

私がつこりと微笑み、そしてバクちゃんが嬉しげに「きゅっ」と鳴く。そんなやりとりが、まるで心が通い合っているようで幸せだ。

誰にも見えない、可愛いバクちゃん。

そう、誰にも見えていないと思っていたのだ。が。

「あなたはたしか、王春麗おうでしたね。春麗、その足下にいるのはなんですか？」

「はい？ えっ李夏さま!？」

ある日、突然後宮の一番偉い人に話しかけられて、私はびくつとしながら李夏さまの顔を見た後、慌てて礼をした。

偉い人に話しかけられるなんて、末端の女官からしたら不吉なことこの上ない。

怒られるか文句を言われるか、とにかくなにを咎められるのだろうと冷や汗が出る。そんな私に李夏さまはもう一度、私がよく聞こえるように囁んで含めるように言った。

「もう一度聞きますね。その足下にいるのはなんですか？」

「はい？ 足下、ですか？」

私は思わず目をぱちくりとさせながら、改めて李夏さまを見返した。

李夏さまは、今もいつもの天女のような美しい完璧な微笑みを浮かべている。が、その柔和な微笑みとともにさらに繰り返された言葉は大変不穏だった。

「見えているのですよね？」

「……はて、なんのことでしょう？」

「きゅっ？」

ちよつと、このタイミングで鳴くんじゃないよバクちゃん……

私は必死に動揺を隠して笑顔を作ったが、背中を伝う冷や汗は止められなかった。

「今のも、聞こえましたよね？」

ああ李夏さまの天女の微笑みが、これほど危険に感じたことは今までありませんでしたとも。

「えーと……なんのことでしょう……？」

他の人には見えていないと思っていたから、全く油断していた。

きつと私だけが見えているのだろうと、いや正直なところ、単に私の頭が少々おかしいのだろうと思っていたのだ。

でももしかしたら、これはなにか不味い事態なのかもしれない。

だってこのバクちゃん、絶対にそこらの猫や犬みたいな普通の動物と同じとは言えない存在なのだけはわかるから。

この若干透けてる獏ぼくが、なにか問題だったらどうしよう……

クビかな？

うーん、それは嫌だなー……

今、後宮の外になんて出たら、あつという間に奴と遭遇する気がしない。

なにしろ前回の人生で私が奴の幸せそうな生活をうっかり垣間見た時期が、もうすぐなのだから。

私が激しく動揺していると、

「王春麗、少し私に付き合いませんか」

そう言って歩き出した李夏さま。

言っていることは提案だけれど、これはれっきとした命令である。

つまりもちろん、ただの下っ端一女官である私に拒否する権利なんて微塵もないのだ。

でも……ああああ、行きたくない……！

李夏さまの後ろをうなだれつつ歩く道すがら、バクちゃんがこの空気を読んでどこかに行ってくれないかと必死に願ったけれど、もちろんそんなことはなかった。

別に足下なんて見なくても、気配でバクちゃんがついてきているのがわかる。

いつものごとく、ご機嫌でちょこちょこついてきている。一体なにが気に入って私に付き纏っているのかは未だにわからないのだが、明らかに気に入られていた。

一応は後ろでしっしつと、どこかに行けと必死に手を振ってみたけれど、全く意に介する様子もない。

この半透明の猿ぼんをつれていたせいで、どうなるのか今後の展開がまったく見えない。なんとか無事に生きて明日を迎えられますようにと、とにかく私は必死で心の中で祈るしかなかった。

着いた先は、李夏さまの執務室のようだ。

ぴしゃりと扉が閉められて、広い執務室に二人きりである。

「きゅっ？」

……二人と一匹だった。

初めて入った李夏さまの執務室は、広いのには様々な書類が山ほど積まれ、壁面は全てぎっしり書類の詰まった書庫のような所だった。

さすが後宮で一番の宦官、太監長さま。たいへんに立派な執務室です。

そして目の前には、ゆったりとした態度かつ天女の微笑みを浮かべた李夏さまが。

ほんとこの偉そうな部屋にとてもよくお似合いで……と普段なら思わずうつとりと眺めるところだけれど、今はそんな悠長な感想が入り込む余地なんてもちろんない。

「あの……」

「さて王春麗。先ほどの質問に、ここでなら答えられますか？」

単刀直入である。

もしこの人が本物の天女さまならそんな無慈悲なことはしないだろうに。

「はて……先ほどからなんのことだかさっぱり……」

私は作り笑顔であくまでしらを切った。

なにしろ私は穩便にここにいたいのである。

少なくともあと数年は。いやせめてあと一年は。

うっかり変な目立ち方なんてしたくはなく、ひたすら地味に地味に潜伏していきたいのである。単なる無邪気な下っ端の一女官として。

だからもしたとえなにか変なモノに憑かれていたとしても本人はなにも知らない、そういうことにしたいのだ。

私は無罪！ なんの他意もない無害で平々凡々な女官です！

「しらをきってもダメですよ。安心なさい、別にあなたを責めようというわけではありません。ただ少々事情を聞きたいだけです」

「あ、そうですか？ クビではない？」

あっさり警戒を解いた私だった。

まあ事情を話すだけなら……話して困っていると訴えればお咎めなしで職場の洗濯場に戻れるというのなら、さっさと終わらせればいいか。そう切り替えた私だった。

「クビにはしませんよ。ですから私の質問に正直に答えてください。最初はたまたま近くにいただけなのかと思っていたのです。しかしどうもそうではない様子。その神獣は、いつからあなたと一緒にいるのですか？」

「へ？ 神、獣……？」

私が眉間にしわを寄せて、はて、とバクちゃんの方をちらりと見ると、バクちゃんはつぶらな瞳で私を見上げてまた、

「きゅっ？」

と鳴いた。可愛い。安定の可愛さである。

しかし「神獣」とは？ それは、なに？

「まさか神獣を本当に知らないのですか？ 随分と懐いているように見えますが。それは、いつからそこにいるのですか？」

李夏さまは少々戸惑っているようだったが、さらにそう質問をしてきた。

「あー、えーと……一ヶ月くらい前からでしょうか……？」

「それまでは見なかったということですか？」

「はい」

「初めて見たのは何処ですか？」

「初めては……私が夜寝ていて、ふと起きたら目の前にいましたので、寝所でしようか」

「……よほど美味しい夢でも見ていたのでしょうかね」

その言葉に、私はえへへと苦笑いで返したのだった。

そうだね、奴の夢だから、よほど美味しい悪夢だっただろう。

そういえばあれから全くあの夢を見ていない。なんて素晴らしい。もうできれば一生私のそばであいつの出てくる夢を食べていてほしいものだ。そんなことを考えつつ、「では私はこれで……？」

私はそわそわと、もう帰りたいという空気を出しながら扉を見た。